〔倭訓栞 前編十九〕なぎさ　渚をよめり、〇中略　なみぎはをなぎさといふは、はとさと同韻の轉也、

〔古事記 上〕於是海神之女、豐玉毘賣命、〇中略　爾即於其海邊波限以鵜羽爲葺草造産殿、於是其産殿未葺合、不忍御腹之急、故入坐産殿、〇中略　是以名其所産之御子、謂天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命、訓波限云那藝佐、訓葺草云加夜、

〔古事記傳十七〕海邊と波限とは同じことの如くなれども、海邊と云は廣く、波限は正しく波の打寄る際なり、又波限とは、川池などにも云、故に、海邊のことはこれにもあるべし、

〔萬葉集二十〕都乃久爾乃宇美能奈伎佐爾布奈餘曾比多志塗毛等伎爾阿母我米母我母、

右一首、鹽屋郡〇下野國上丁大部足人、

〔源平盛衰記四十二〕屋島合戰附玉蟲立扇與一射扇事

即荒手ノ兵ヲ指向テ、入替入替戰ケリ、源平互ニ甲乙ナシ、兩方引退キ、又强建處ニ、沖ヨリ莊タル船一艘、渚ニ向テ漕寄、

〔倭訓栞 前編二十七〕へ　邊は經の義、音にあらず、奥に對しいふ、万葉集にも奥へ往、邊ゆきと見えたり、又端の義、はし反ひ、よて海邊をうなび、はま邊を濱ひ、岡邊ををかびと古歌によめり、

〔日本書紀二 神代〕一書曰、〇中略　豐吾田津姫、恨皇孫不與共言、皇孫憂之、乃爲歌之曰、憶企都茂幡、陛爾幡譽戻耐母、佐禰耐據茂、阿黨播怒介茂譽、播磨都智耐理譽、

〔萬葉集 四相聞〕高安王裹鮒贈娘子歌一首

奥幣往、邊去伊麻夜、爲妹、吾漁有、藻臥束鮒、

〔藻鹽草 五水邊〕海

へ。海へたと云り、へた淺き所を云也、

〔書言字考節用集 乾坤〕海邊 舊事紀

邊